診療科紹介 ― 耳鼻咽喉科―

耳鼻いんこう科部長　松崎　勉

私（松崎）と西元謙吾医長、吉福孝介医長の3名で診療しております。診療の2つの柱は、①頭頸部癌の診療、②手術・入院治療の必要な耳鼻咽喉科疾患の医療機関との連携による診療です。

■　頭頸部癌の診療について

平成26年1年間の新規頭頸部癌患者は136例で、治療は、標準的な手術治療、放射線治療、化学療法を組み合わせて行っております。再建を含めた手術も私たち3人で行い、術後機能を含めた手術の評価をして症例に活かせるようにしております。放射線治療は、放射線科医、放射線治療認定看護師が迅速に対応、化学療法もがん化学療法認定薬剤師・病棟薬剤師がプロトコールや副作用のチェック、患者説明などを行い、分子標的薬を含めた標準的治療が行える体制です。治療は、治癒と治療後のQOLを重視し、また、患者さんの生活状況、希望を取り入れた治療法選択が必要と考え、患者・家族と話し合う際、病棟看護師が一緒に入り、意思決定支援を行うことにしております。

また、がん治療への支持療法体制も整っており、がんリハ、口腔ケア、緩和ケアとそれぞれの専門スタッフが多職種で協働できる体制となっています。また、緩和ケアチームと病棟スタッフの共同で、毎月の患者サロン時に季節の行事を取り入れたコンサートを開催しています。

■　外来・入院・手術治療

外来診療は、週3日（月、水、金）の午前中で、機能分化、診療業務の負荷の軽減を考えて新患はすべて紹介のみとさせていただいています。平成26年度の新規紹介患者数は、1189名でした。手術は、麻酔科および手術室の理解の下、月曜日から金曜日の毎日、午前午後ともに行える体制で手術依頼の患者さんに早急に対応しており、平成26年度の手術件数は642件でした。手術以外の入院治療症例は、悪性腫瘍が半数ですが、気道の急性炎症に対する医療機関からの急患受け入れ症例も多くありました。

■　診療業務の効率化と連携

現場にストレスのかからない、完全ペーパーレスの電子カルテシステムが導入されており、検査結果や画像所見をストレスなく確認でき、病状説明がスムーズにできるようになっております。また、医師事務補助者、クリティカルパスが我々の業務負担の大きな軽減になっており、外来看護師とのチームワークで地域の先生方との診療情報提供を行ってくれております。新患が紹介制のため、各医療機関の方々には、いつもお世話になっており、お手を煩わせていることかと存じます。できるだけ、医療情報の共有が図れるシステムの構築を行い、皆様の期待に応えていきたいと思っておりますので、御指導の程宜しくお願い致します。

予約センター案内　TEL 0120-68-0704

平成27年5月より鹿児島医療センターの「予約センター」の受付時間を変更しています。

［平日］9：00～15：00⇒［平日］9：00～17：00

（土日祝日・12月29日～1月3日を除く）

■お問い合わせ先　独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）
〒892-0853　鹿児島市城山町8番1号
(代)TEL 099(223)1151　FAX 099(226)9246　http://www.kagomc.jp
【地域連携】薗田・谷口・田上・吉永・鷲頭・吉留・山口・櫻木・宮崎
【がん相談】松崎・森・水元・木ノ脇・原田・杉本
フリーダイヤルFAX専用▶0120(334)476
※休日・時間外は当直者で対応します。

連携室だより
鹿児島医セン
鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）
2015.9 vol.113

看護の日　ふれあい看護体験2015

担当者：田上看護師長、片平看護師長
神野看護師長、佐々木副看護部長

「看護の心をみんなの心に」をテーマに、8月10日（金）に”ふれあい看護体験2015”を行いました。この催しは、当院で実際に看護体験をしていただき、「いのちの大切さ、思いやり、支え合いを伝え、看護への理解を深める」という目的で毎年行っています。今年は3名の高校生の参加がありました。

当日は、まず病院見学を行いました。3名とも緊張した面持ちでしたが、薬剤部や検査科など他部門の方にも暖かく迎えていただき、丁寧な説明をして頂きました。その後は、病棟で見学や体験を行いました。移送の患者体験や、清潔ケア、コミュニケーションなど患者様とのふれあいを通して、看護することの喜びや難しさを感じることができていました。また、先輩看護師に看護師になるきっかけや、看護の魅力を語ってもらう時には、真剣に聴き入っていました。

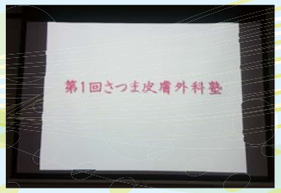
今日の体験を通して、全員が改めて看護師になりたいという思いを強くしたようです。この思いを忘れずに、将来の夢に向かって頑張って欲しいと思います。

ふれあい看護体験の学生の感想

今回の「ふれあい看護体験」を通して、思ったこと、感じたことは、まず、院内の見学をして、思っていたよりも機械などが多く、最新の設備が多く、さらに目指す気持ちが強くなりました。また、実際に患者さんと話をしてみて、患者さんの中にはなかなか家族に会えない方もいらっしゃって、そのさびしい思いをされている患者さんたちと若い自分らが話すことによって、普段なかなか言えないこともとてもたくさん話していただいて、患者さんも笑顔になり、自分も自然と笑顔になっていました。今回の体験で、患者さんとコミュニケーションをとる難しさや大切さを改めて知ることができました。また、1つの病院が、いろいろな職種の方々が連携することによって成り立ち、いろいろな人たちの支えになっているんだなあと感じました。自分にとってとても貴重な体験になりました。本当にありがとうございました。

（川辺高等学校　西野　隼平）

第１回
さつま皮膚外科塾を開催しました

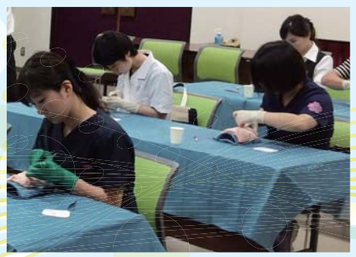


去る8月1日（土）に、鹿児島医療センターで臨床研修を行っている研修医を対象に、さつま皮膚外科塾を開催いたしました。第1回となる本年は、「整容性に優れ、より痛みの少ない縫合手技」を身につけるため、ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）との共催により、真皮縫合をテーマに行いました。

まず松下茂人（皮膚腫瘍科・皮膚科医長）の開会挨拶に続いて、真皮縫合の基礎やコツについての講義を行いました。動画を用いて実際の手指の動きを解説した後に、参加者全員が豚皮と4－0PDSⅡを使って真皮縫合の実習を行いました。創縁を外反させるためには縫合針をどこに刺入するか、縫合針の経路をどのように確認するかなど、講師が一人一人に指導しながら実習をすすめていきました。基本的な真皮縫合に慣れてきたら、鑷子だけでなくスキンフックを用いて皮膚を把持するなど、より愛護的な縫合手技を学びました。参加された先生方は非常に集中されていて、あっという間に2時間が経過しました。最後は外科部長の菰方輝夫臨床研修管理委員長が閉会の挨拶で締めくくりました。

第1回となった今回は12名の研修医に参加して頂きました。真皮縫合は簡単そうに見えて奥が深いものですが、このたびの皮膚外科塾が、研修医の皆さんの翌日からの診療に役立っていることを祈念します。最後に、今回無事に開催することができましたのは、院内各部署および共催、後援各所のご協力の賜と思っております。末筆ながらこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（文 責：皮膚腫瘍科・皮膚科医師　青木　恵美）



職場紹介

【東２病棟（ＩＣＵ）】

東２階病棟（ＩＣＵ）は平成17年に16床の施設基準を取得しました。看護職員数は６０余名で、ＩＣＵの他に心臓カテーテル検査室、透析室に対応しています。内科系、外科系を問わず当院の全診療科で重篤な急性機能不全の患者を収容し、集中的な治療と看護に努めています。平成２６年度の1日平均患者数は１４.３名、病床利用率は８９.６％、平均在室日数は4.5日で入退室の回転は速く、常に緊急入院が円滑に行えるよう後方病棟との連携を行っています。ドクターヘリからの搬送は31件で北薩や種子島、屋久島方面からの搬送も増え、緊急手術等で救命されています。心カテ室では、検査件数２１００件を超え、緊急カテーテル治療は２８０件、また肺高血圧治療のＢＰＡ（バルーン肺動脈形成術）や不整脈の治療アブレーションの実績も増えてきています。

入室対象患者は、心臓血管外科系では冠動脈バイパス術や大動脈瘤などの人工血管置換術、弁置換術などの術後、脳外科系ではクモ膜下出血、脳出血、内頚動脈狭窄などの術前後、また、外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科の領域では侵襲の大きながんの術後の入室が主となっています。その他、循環器内科系は虚血性疾患、心不全、不整脈などです。

急性心筋梗塞などの緊急カテーテル検査、治療にも２４時間体制で対応できる体制を整えており、Door to balloon time は９０分が目安とされていますが、当院は平均６０分で、救急外来からカテ治療までの連携がスムーズに行われています。

腎不全合併の循環器治療に対しても透析室を併設し、またベッドサイドでの持続透析にも対応しています。

病棟の目標は「生命の危機的状況にある患者・家族の状況を理解し、早期に介入支援を行う。」「安心・安全な医療が受けられるよう他職種との連携を強化する。」を掲げています。

診療の介助と日常生活の援助という看護の基本的役割は他部署と同じですが、患者の生命の危機的状況にあるのが特徴で、最新の治療、薬剤、ME機器（人工呼吸器、人工透析装置、IABP、PCPS、各種モニター、注入用ポンプ類）管理のため、専門的知識に基づいた判断力や高い看護能力が必要とされます。

危機的状況に直面した患者・家族への配慮も重要であり、早期介入及び支援を行っています。患者は死への恐怖や特殊な治療環境などにより心理的危機状態にあるため、不安の軽減に努め、環境を調整し、家族に対してもその思いを傾聴し、労い、面会も臨機応変に対応するように努めています。身体面のみでなく、全人的に患者理解、対応ができる看護を目指しています。

（文 責：東2階（ICU）師長　上原　真知子）